

コーパスを用いた英語の応答表現に関する研究

―類義語を持つ語彙的表現の語法分析―

山本五郎

本論文は、英語の話し言葉において、話し手の発話内容に対する理解や関心、あるいは、発話内容に対する判断や評価などを示すために、聞き手によって発せられる語彙的応答表現に焦点を当て、コーパス言語学の手法を用いて会話におけるその意味や機能を分析することを目的としたものである。本論文では、応答表現として、*Absolutely* とその類義語である *Certainly* と *Definitely*, *Exactly* と *Precisely*, *Sure* と *Of course* を取り上げ、コーパスとして *WordbanksOnline* を用いて分析を進めた。

本論文は、6章から成る。第1章は、英語の応答表現に関する主だった先行研究として、Fries (1952)をはじめ、Yngve (1970), Schegloff (1982), Goodwin (1986)などの研究成果について適宜会話データを引用しながら概観し、*continuer* や *assessment* といった後続の研究の多くで採用されている用語とそれらの機能について説明した。また、先行研究では、限られた会話データに基づいて分析が行われており、そのため *uh-huh*, *mm*, *oh* のような非語彙的表現や、*really* や *I see* のような語彙的表現など、会話で頻出する一部の典型的な表現群に偏って研究がなされてきた点を示した。さらに、Yngve によって提唱され、多くの研究で採用されてきた *backchannel* という用語の曖昧性に関わる問題点や、先行研究における用語の不統一に関する問題についてまとめた。

第2章では、本論文の分析の観点に直接関係する先行研究の内容について言及した。聞き手によって発せられる応答表現は、話し手の発話が先行することを前提としているため、多くの研究では、先行する話し手の発話内容との関係に注目して、聞き手の応答表現の機能を分析することが一般的であった。これに対し、近年、Tolins and Tree (2014)のような一部の研究で、後続の文脈への影響という新たな観点から分析がなされるようになっているため、その研究の手法と成果についてまとめた。また、特定の表現に注目した語法研究に

において、コーパス準拠の EFL/ESL 辞書を活用することの有効性について述べた。さらに、本論文で使用するコーパスである *WordbanksOnline* の特性と使用法について言及し、データ検出に用いたコーパス検索式 (CQL) についても実例を提示して説明した。

第 3 章から第 5 章では、本論文で焦点を当てる語彙的な応答表現として、*Absolutely* とその類義語である *Certainly* と *Definitely*, *Exactly* と *Precisely*, *Sure* と *Of course* について各章で取り上げた。これらの表現について、聞き手による応答表現としての用法に関する EFL/ESL 辞書及び語法書での記述をまとめ、その内容について *WordbanksOnline* を用いて検証した。また、先行する文脈とこれらの応答表現の関係にあわせて、近年注目されている後続の文脈への影響という観点からもコーパスデータを提示しながら分析した。いずれの表現も、語義、使用域、使用頻度などの点では類義表現との違いが確認されたが、応答表現としての機能については後続の文脈への影響も含め高い類似性が認められた。また、これらの応答表現は、語彙的表現であるため聞き手の判断や評価等を示す *assessment* とし機能することが予想されたが、話し手が発話権を保持することを容認したり、発話内容の理解を示す合図である *continuer* として用いられる場合が多いことを示した。

第 6 章では、第 3 章から第 5 章までの分析結果を総括し、特に後続の文脈との関係について、本論文で分析対象とする聞き手によって用いられる語彙的な応答表現の機能について考察するとともに、今後の課題などについて述べた。

本論文の意義は、3 点にまとめることができる。1 点目は、英語の応答表現 (*back channel*) に関する先行研究では取り上げられてこなかった特定の語彙的表現を分析対象としたことである。2 点目は、一般に公開されている大規模コーパスを用いて分析を進めたことである。3 点目は、各表現について個別に焦点を当てるのではなく、類義表現と比較することでその語法を明らかにしようとしたことである。

1 点目については、応答表現に関する先行研究では、限られた談話データに基づいて分析を進めることが多く、出現頻度のあまり高くない表現については充分に取り上げられてこなかった経緯がある。また、多くの先行研究は、分析対象とする表現について、依頼や

許可を求める表現やまた情報を確認するための質問など、話者交替が想定される疑問文への返答を含めないとするものが多かった。このため、*yes* の強意表現として同意や承諾、許可等様々な意味を持って、聞き手に対する質問や依頼、また話し手の主張や提案に対して用いられることがある語彙的表現は、先行研究の分析対象として十分に注目されてこなかったという背景がある。それらの表現に焦点を当て、談話機能のみに注目するのではなく、語義や使用域などについても包括的に分析対象としたことに意義があると言えよう。

2点目は、本論文の分析の再検証やデータ検出の再現性に関わる点である。先行研究では、独自に収集した談話データに基づいていることが多く、また各研究では限定的な文脈しか提示されないこともあり、それぞれの表現がどのように用いられていたのかを再検討することが容易ではなかった。コーパスを用いた McCarthy (2003) についても、複数のコーパスを独自に再構築してサイズを調整しており、最終的に分析に用いたコーパスは後続の研究で用いることができないものである。本論文では、辞書学や語法研究の分野において広く活用されている *WordbanksOnline* を用い、且つ、各章でそれぞれの表現のコーパスデータの検出に用いた検索式については明示した。このため、本論文で引用したコーパスデータや検出数は、容易に再検証することが可能である。この点については、応答表現に関する研究では先駆的な特徴であると言えるだろう。

3点目は、各応答表現を個別に扱うのではなく、類義性の高い表現と合わせてその違いに注目した点である。先行研究では、非語彙的な表現が分析の中心であったことに加えて、語彙的な表現を取り上げることがあっても、さまざまな表現を一括りにした上で機能分析を行うことが多かった。類義表現の違いに焦点があてられた応答表現の研究は充分に行われてこなかったため、語義や使用域、また用法の違いなどに注目し、類義表現間の類似点や相違点について注目した点も本研究の意義として挙げるができる。

コーパスから検出したデータに基づいた本論文での分析及び考察が、話し言葉における応答表現に関する研究の一助となれば幸いである。